

待降節第三主日

2016.12.11

マタイ 11・2-11

「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、他の方を待たなければなりませんか」。待降節第三主日の今日の福音は、洗礼者ヨハネのイエスに対するこの問い合わせのことばから始まっています。洗礼者ヨハネは今や囚われの身となって、そこに繋がれている牢の中からこのような問いをイエスに投げかけています。「来るべき方」とは、ヨルダン川沿いのユダの荒れ野で、自分のもとに押し寄せてきた人々に向かって、「わたしの後から来られる、わたしよりも優れた方」ということばをもって指し示そうとした、天の国の到来をもたらすお方です。身にらくだの毛衣を纏い、腰に革帯を締め、いなごと野蜜で命をつなぐ、荒れ野の孤独な生活の中で、神の示しによって、ひたすら天の国が来ることを待ち望み、その到来が間近に迫っていることを人々に宣べ伝えた洗礼者ヨハネです。人々の列に交じって自分に近づくイエスを前にして、「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたがわたしのところへ来られたのですか」と言って、一旦は身を引こうとしながらも、イエスに洗礼を授けて、イエスの父なる神から受けた使命の開始に立ち会った洗礼者ヨハネです。そのヨハネは今や牢獄に繋がれる身となって、その牢獄の闇の中から、イエスに対してあのような問いかけを発しているのです。そのようなヨハネに、わたしたちは親近感を感じ、そのようなヨハネをいとおしくさえ感じます。わたしたちもまた、ヨハネがそこに繋がれた牢獄の闇を経験しているからです。信じていたはずのことが、確信を持ってそれに全力を注いで来たはずのことが、闇の彼方の遠い出来事のように思える経験はわたしたちのものでもあるからです。その牢獄の闇の中であって、しかし、ヨハネのうちには、イエスへの想いが、イエスへの期待が消えてしまっているではありません。身は牢獄の格子に阻まれながらも、弟子たちに託して、ヨハネは自分の胸のうちの疼きをイエスに訴えているのです。「来るべき方はあなたですか。天の国の到来をもたらされるお方は、本当にあなたなのですか」。ヨハネのこの心の叫びを、わたしたちも自分のうちに感じ取りたいと思います。なぜなら、わたしたちはイエスへの信仰に慣れきってしまい、イエスがもたらしてくださる天の国への憧れが、わたしたちのうちに風化してしまっていることに気づかないでいることが多いからです。洗礼者ヨハネはあの牢獄の闇の中にあっても、心のうちに去来するイエスへの問いかけを吐露することによって、わたしたちにイエス・キリストを指し示しているのです。

「行って、あなたがたが見聞きしていることをヨハネに伝えなさい」。戻って来た弟子たちからこのイエスの答えを聞いたとき、ヨハネはそれをどのように受け止めたのでしょうか。「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人には福音が告げ知らされている」。ヨハネの弟子たちがイエスのもとで、イエスについて見聞きしたことです。けれどもそれは、牢獄にいるヨハネには、弟子たちの報告を通してしか知ることの出来ないことです。ヨハネは自分の目でイエスが言われたことを確かめることは出来ないのです。「わたしの後から来る、わたしより優れたお方。わたしはかがんでその方の履物をお脱がせする値打ちもない」と人々に指し示したイエスによって、ヨハネは今やその信仰を問われているのです。牢獄のヨハネは、生涯の最後をそのような状況の中で閉じることによって、わたしたちにイエスへの信仰とはどのようなものであるかを指し示すのです。わたしたちもまた、今日のイエスのおことばが指し示していることを福音書の報告を通してしか知ることが出来ません。

弟子たちの報告を受けた時、ヨハネは、今日の第一朗読でわたしたちも聴いた預言者イザヤのことばを思い出すことが出来たのでしょうか。「わたしにつまずかない者は幸いである」。弟子たちの報告の最後に追伸のように添えられていた、このイエスのおことばの意味を、あの牢獄の闇の中で幾度も幾度も噛み締めているうちに、ヨハネの心の中に、イザヤ預言者のこのことばが蘇って来たに違いないと信じたいと思います。そうでなければ、愚にもつかない理由によって牢獄の闇の中に葬り去られたヨハネの生涯は、あまりにも悲劇的だからです。一途に天の国の到来を待ち望んで生きて、あの荒れ野での過酷な孤独の日々は何のためだったのでしょうか。「わたしの後から来られる、わたしよりも優れた方」を指し示すために費やされた彼の生涯は何のためだったのでしょうか。あの牢獄の闇の中で、イエスのもとからもたらされた回答が、ヨハネの生涯に救いをもたらすメッセージとならなかったとしたら、彼の生涯のすべては無意味なままに牢獄の闇の中に消えていってしまったのです。

決してそうではない。今日の福音の、洗礼者ヨハネについて語るイエスのことばが、そのことをわたしたちに保証しています。たとえ、他の誰の目にもヨハネのそのような生涯が、この世の権力者の気ままさに弄ばれた末の悲劇的な死に終わった、挫折以外の何ものでもないと映ろうとも、ヨハネのそのような生涯は、ヨハネがその生涯をかけて証しようとしたイエスにはしっかりと受け止められていることをわたしたちは知ることが出来るのです。牢獄の中に身を置くヨハネの耳には直接届くことがなかった、イエスのこれらのおことばは、しかし、神のご計画の中にあつたヨハネの生涯の全容が明らかにしているのです。

す。

この世の現実を生きるわたしたちに洗礼者ヨハネの生涯が残した最後のメッセージは、これらのイエスのことばがヨハネの耳には直接に聞こえなかったということです。ヨハネにはそれは必要なからです。ヨハネには「わたしにつまずかない者は幸いである」と言うイエスのことばだけで十分だったのです。そのことばを胸に、そのことばを支えとして、ヨハネは懲憑(しょうよう)としてあの牢獄の闇の中でその生涯を終えることが出来たのです。

ヨハネについて語るイエスのことばは、ヨハネのためではなく、ヨハネの生涯が何であったかを語ることによって、この世の現実の中をなお生きなければならないわたしたちへの励ましのことばとなっているのです。

「はっきり言うておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネよりも偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である」。今日の福音のイエスの最後のおことばです。イエスによってもたらされた天の国のありかを知ったわたしたちは、ヨハネよりもはるかに、到来する天の国の近くに呼ばれているのです。今日、待降節第三主日のこのミサで、洗礼者ヨハネがその生涯のすべてをかけて指し示した、そのヨハネの生涯のすべてを受け止めてくださったイエスによってもたらされる、近づいている天の国に対するわたしたちの思いを新たにしたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高